

オーストラリアでの1か月

沼澤 秀雄（スポーツウエルネス学科教員）

パースは西オーストラリアに位置し、シドニー、メルボルンなどと並ぶオーストラリア第4の都市。公園やリゾートビーチが数多く点在し、世界で一番美しい街として知られている。エディスコワン大学（ECU）はそのパースから電車で30分のジュンダラップという郊外の街にある。今回私は本学の短期派遣研究員として2月下旬から3月中旬までの1か月間、ECUに滞在した。目的はECUのNosaka教授を訪ね、研究の打ち合わせをすることである。各国からやってくる研究者にはIDと専有の机とPCが与えられた。この期間は会議のことも授業のことも考えずに、毎日ミーティングの時間を取ってもらい、論文や実験データを紹介していただいたり、学部間提携の書類を作成したりできた。なんだか大学院生に戻ったようでとても新鮮で懐かしい時間だった。



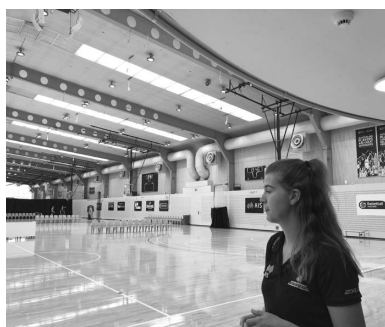
オーストラリアは季節が日本と逆になるため夏から秋に向かっており、40度を超える暑い日もあれば、曇って時折、雨が降る日もあった。ただ、日本のように湿度が高くないので、日陰に入れば涼しいし、雨も長く降り続くことはなかった。事前に滞在するホテルを決める時に、Airbnbを勧められ、初めて一軒屋を借りて生活することに挑戦してみた。予算内に収まる物件から選んだのが2ベッドルーム、ダイニングにキッチン、庭にはまだ熟していないパッションフルーツが鈴なりに実っている家だった。にもかかわらず日本から遊びに来てくれる人はおらず、1か月間一人で過ごすことになった。

短期派遣研究員を引き受けてくれたECUのNosaka教授は国際的なヒトの筋肉の研究者である。エキセントリックコンストラクション、つまり引き伸ばされて動く筋肉の収縮様式を研究している。それでも分かりにくいかもしれないが、力に抗いながら筋肉が伸展していく力の出しかたの特徴を見つける研究である。エキセントリックと言うと、「ぶっ飛んでいる」「変わっている」というようなイメージがあるかもしれないが、Nosaka教授はまさにエキセントリックに数多くの論文を発表し続けている。滞在中も研究室に4人の訪問者があり、共同研究の話や研究成果をどのようにして世に出していくかといった相談をしているようだった。Nosaka教授が指導している大学院生の中には、以前、全日本のバレーボール選手のトレーニングを担当してい



たという日本人研究者がいた。ECUに来て3年目でようやく奨学金をもらえるようになり、なんとか研究を継続しているという。彼の研究は今までやられてきた重さを基準にする筋トレではなく、筋を動かす速さを基準にする方法を検証することで、この検証のやり方がとても面倒なのだ。その難しさは何度も所定の手続きを踏みながら負荷を変えてデータを収集するといった気の遠くなるような作業で、毎日5時間以上実験を行っていた。新しいトレーニング方法が世の中に出るためには地道な基礎データの蓄積とそれを検証した論文が必要なんだということを実感した。

滞在中にずっと前から行ってみたかった国立オーストラリアスポーツ科学センター（AIS）を訪れた。2000年に開催されたシドニーオリンピックのために建てられた施設で、日本はこの施設を参考にして、国立スポーツ科学センターとAJINOMOTOナショナルトレーニングセンターを作った。パースから飛行機で4時間そして高速バスで3時間半かけてAISがあるキャンベラへ向かう、結構な旅である。キャンベラはオーストラリアの首都ではあるものの、そんなに大きな都市でもなく、落ち着いた静かな街で円、三角、六角形といった幾何学模様をモチーフにした建物が印象的だった。国会



議事堂の他に 国立の大学や博物館、美術館それに様々な研究所があった。どうも首都を決めるときにシドニーとメルボルンが譲らなかったらしく、どちらでもないキャンベラになったということらしい。AISはキャンベラの市街からさらにバスで20分行った郊外というより山の中にあった。見学ツアーに申し込んだのは私とやけにスポーツに詳しいおばさん2人だった。案内してくれたのは、奨学金をもらいながら、この施設でバレーボール競技をしている学生さんだった。広大な敷地にある様々な競技の練習場を丁寧に説明してくれた。AISはすでに20年以上国内競技スポーツの拠点として稼働しており、さすがに最新のトレーニング施設という感じではなかった。参考にさせていただいただけあって、日本のナショ

ナルトレーニングセンターの設備の方が充実しているのではないかと思った。しかしながら、小ホールをコンサートや結婚式に使ったり、地元の子供達のためのスクールを開催したりといった施設運用の方法は実に工夫されたものであった。国の奨学金で競技スポーツに打ち込める制度も見習うべきところだろう。

パースは本当に美しい街だ。芝生の広いグランドがあちこちにある。楽しそうな色あざやかな遊具が公園に必ずと言っていいほど置いてあるし、海岸沿いにはビーチとカフェとレストランが点在している。街の中心地にある大きな通りにはアーティストが製作したオブジェが横たわっている。そこで働く人々はとても明るい（そう見える）。聞けば、オーストラリアは鉱物の資源がたくさんあったり、人口が増えているので住宅をどんどん増設している関係で、いわゆるガテン系で働く人が多い。それでいいお給料をもらっているそうだ。だから、日本のようにホワイトカラーの人が偉くてお金持ち、ブルーカラーの人が大変な仕事をしているという感覚はないらしい。税金も物価も高いけれど、社会保障がしっかりしており、公共サービスが充実している。例えば、キャットバスといって街の中心を廻るバスは無料で市民の足になっているし、公園にはスイッチを入れると電源が入るバーベキューグリルがあり、自由に使える。休日になるとたくさんの家族がパーティーをしていた。

今回のオーストラリアでの1か月で思ったことは、職場での人間関係であったり、将来への不安であったりといった日本でのストレスフルな生活が、この国の



人々にはあまり感じられないということだった。金曜日になると大学のオフィス（大学院生室）では週末はどこに行くかということが話題になり、どこかそわそわしているような時間が流れる。それは仕事のONとOFFをはっきりさせて土日レジャーを楽しむというお国柄のせいなのか、天候に恵まれ、海や砂漠など広大な自然環境からくるものなのかはわからない。そもそも、たった1か月、こちらの人たちと触れ合っただけで、気持ちを理解するのは無理な話で、本当は多くの悩みを抱えながら生活しているのかもしれない。しかし、私には人の幸福度という尺度があって、それを数値化できたら確実に日本よりもオーストラリアが上だと思う。それぐらい休日のレストランで食事をしている家族連れの様子を見ると楽しそうで幸せそうに見えた。帰国する機内は修学旅行帰りの日本の高校生で賑やかだったが、人の幸せとは何か、福祉とは何か、スポーツで何ができるのかを考えさせられた。